

弔辞 江川 卓 君に

原 卓 也

江川君！

君が突然ふっとこの世を去ってしまったという信じられぬ知らせを告げられたのは、今この原稿を書いている病院のベッドの上だった。病状に影響を与えてはと案じながら、家内と息子が慎重に言葉を選んで教えてくれたのである。

君の体調がずっとすぐれぬことはかねて承知していたし、こちらも療養にはげむ身だから、お互いに頑張ろうという気持ちでいたのだが、まさかこんなに突然、二度と会うことがなくなることがあろうなどとは……

君との付き合いは半世紀以上に及ぶ。いや、親同士のそれも考えたら一世紀を超えるだろう。君の父君、馬場哲哉と、わたしの父、久一郎とが創設された早大露文科で同僚として教壇に立ち、片上伸主任教授のスキヤングルに抗議して二人いっしょに辞表を叩きつけた「事件」は有名だが、その後東京外語で息子の馬場敦夫とわたしがクラスメート、さらにソビエト文学の紹介をはじめたことでその兄、宏つまり君と付き合いだすに及んで、お互いに因縁のなみなみならぬ深さを痛感したのだった。

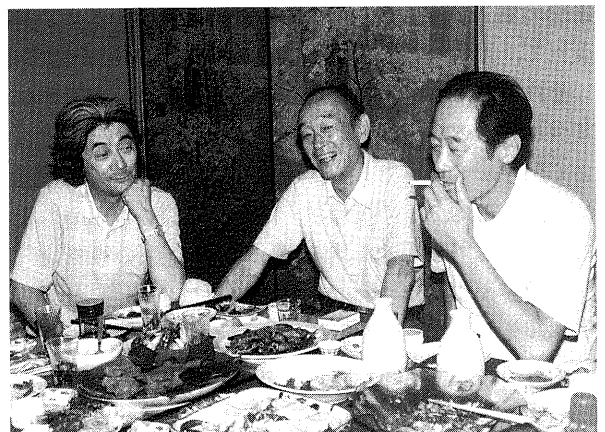
君とは最初から「通訳抜き」で何でも肝を割って、ざっくばらんとことん話し合うことができた。一九六八年のチェコへのソ連軍侵入に際して、あるいはソルジェニツィンのソ連作家同盟除名に際して、わたしが常にすぐ君と連絡し、工藤精一郎、水野忠夫、故人となった木村浩などの諸兄にはからって抗議運動を展開した時に即断即決できたのも、日頃からの深い信頼があったからである。

わが国で翻訳・紹介されるロシア文学関係のビブリオを半年ごとに作成し、そこに同人たちの筆になるものを中心としたエッセーを何本か配するという小雑誌「ロシア手帖」も、もっぱら君と二人で編集、ビブリ

オの作成に当たったものだった。根気を要するしんどい作業ではあったけれど、終わったあとの一杯がこたえられなかった。そういえば、君とはいったいどのくらい酒をくみ交わしたことだろう！ 楽しい酒、悲しい酒、怒りの酒——わたしの人生におけるどんな酒の場面にも、君はいつでも立ち会ってくれていた。短気なわたしにくらべてはるかに大人の風格を持つ君は、わたしを慰め、はげまして、立ち直らせてくれるのだった。君はわたしの本当の兄貴であった。

君がドストエフスキー長篇の謎ときシリーズに取り組み、そのみごとな成果を次々に世に問いはじめた時、わたしはロシア文学の同業者として、脳天をがつんとやられたほどの衝撃と感動をおぼえた。それはまさに江川卓でなければ切り拓けぬ世界であった。ロシア人学者でも到底ここまでは読みこめまいと言ってよい追求だった。おそらく君には「謎ときドストエフスキー」シリーズを完成できなかったことが、何よりの心残りなのではあるまいか。しかし、江川、君のことだからおそらく、詳細なメモを書き残しているに違いない。いつの日か、君のお弟子さんでもメモを整理して、原稿に起してくれる日がくるのではないだろうか、期待している。そんな時にはわたしも可能な限り協力させて頂くつもりだ。なにしろ、君の「謎ときドストエフスキー」シリーズは、日本文化の財産なのだから。

二〇〇一年七月七日



原卓也氏、工藤精一郎氏、江川卓氏